

修士論文（要旨）

2016年1月

看護における高齢者の強みを活かした実践についての研究
－訪問看護場面に焦点を当てて－

指導 白澤 政和 教授

老年学研究科

老年学専攻

214J6006

佐口 清美

Master's Thesis(Abstract)

January 2016

A Study of Nursing Practices Making Use of the Strengths of the Elderly
: Focusing on the Practices of Visiting Nurses

Kiyomi Saguchi

214J6006

Master's Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor : Masakazu Shirasawa

目次

第1章 諸言	
第1節 研究背景	1
第2節 先行研究	2
第3節 先行研究における課題	3
第4節 研究目的・研究意義	4
第2章 研究方法	
第1節 研究デザイン	4
第2節 用語の定義	4
第3節 研究の手順	5
1. 調査対象者	5
2. 調査方法	5
3. 調査内容	5
4. 分析方法	5
5. 倫理的配慮	6
第3章 研究結果	
第1節 調査対象者および紹介事例の特性	7
第2節 カテゴリー形成と結果図	8
1. 研究結果の概要	8
2. ストーリラインと結果図	9
3. カテゴリーと概念の詳細	12
第4章 考察	
第1節 考察	24
第2節 研究の限界と今後の課題	29
第5章 結論	29

〔謝辞〕

〔引用文献〕

資料

分析ワークシート集

第1章 緒言

第1節 研究背景

高齢者に対するケアの考え方を広井¹⁾は、「ケアのモデル」の中で「生活モデル」に位置付けた。とりわけ看護では、高齢者のケアを考えるにあたり、高齢者が望む自律的な生き方の実現に貢献すること²⁾が目標とされている³⁾。そのため、高齢者自身が援助者との関わりを通して主体性を発揮することが目指される。高齢者に対する看護師のとらえ方は、高齢者に対する看護師のケアに影響すると言われている^{4) 5)}。このことに関して柿川⁶⁾は、医療従事者の高齢者イメージは、肯定的なイメージを持っている場合はサービスの向上につながり、否定的なイメージを持っている場合はサービスの質の低下を招くと指摘している。中島ら⁷⁾や松本ら⁸⁾は高齢者に対する看護師のとらえ方に関し、高齢者のポジティブな側面に注目すること、つまり高齢者が本来もっている能力を洞察し、自立への志向性を信頼して支援することに、発想を転換する必要があることを強調している。そこで高齢者が本来もっている能力や発想の転換という点において、従来からの看護の思考過程である問題解決型アプローチの中で、高齢者のプラス面である「強み」をどのように活かし、看護介入をするのか、そのプロセスを明らかにできれば、高齢者の自律的な生き方を支援する看護介入方法の一助として、示唆が得られると考える。

第2節 先行研究

強みはストレングス(strengths)とも表現され、1990年代にアメリカの精神保健福祉サービス領域から発展してきた概念である。佐久川⁹⁾は、高齢者は加齢や病気に伴い身体機能が衰退現象に陥りやすい反面、人生経験が豊富であり、知恵や知識が蓄えられているなどの成熟現象がみられ、ストレングスが最も発揮しやすい条件にある世代であると高齢者ケアにおけるストレングス活用の有用性を述べている。しかし、看護領域における強みについての現状を Feeley ら¹⁰⁾は、強みを基盤にしたアプローチの認識が発展しつつあるにもかかわらず、ほとんどの看護モデルは強みの要素を持っていない、強みに注目している文献においてもどのように実践に使われているのかの記載がないと、強みの活用の遅れを指摘している。

第3節 研究目的

本研究では、訪問看護実践場面を通して、看護師が高齢者の強みをどのようにとらえ、看護においてどのように強みを活かした実践をしているのかのプロセスを明らかにすることを目的とする。

第2章 研究方法

第1節 研究デザイン

訪問看護実践場面から高齢者の強みを活かした看護実践のプロセスが明らかにするため、人間の行動の説明モデルを探求できる修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)による質的記述的研究デザインを採用した。

第2節 研究の手順

1. 調査対象

経験を積んだ看護師を対象に調査するために、調査時点において高齢者の訪問看護に従事する者で訪問看護経験が1年以上かつ臨床経験が6年以上の正看護師で、高齢者の

強みを活かした訪問看護経験がある看護師を対象とした。調査対象者は、訪問看護事業所の管理者より研究協力の同意を得られた者とし、訪問看護事業所の選定は複数箇所を機縁法で行った。

2. 調査方法

研究の趣旨を口頭および文書で説明したのち、同意が得られた看護師に対し、各1回1時間程度の半構造的面接調査を実施した。インタビューは、対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音し、高齢者の訪問看護において、強みを活かして上手くいったと思う1事例について、あらかじめ用意したインタビューガイドをもとに語ってもらった。

3. 分析方法

半構造的面接によって得られた逐語録をデータとし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) に基づき実施した。本研究では分析テーマを「訪問看護場面における高齢者の強みを活かした実践のプロセス」、分析焦点者を「強みを活かした看護を実践している訪問看護師」とし、注意深く逐語録を読みながら分析ワークシートを用いて概念を生成した。

第3章 研究結果

データ分析の結果、訪問看護場面における高齢者の強みを活かした看護実践の構造として、40の概念、8のサブカテゴリー、6のカテゴリーが生成された。訪問看護における高齢者の強みを活かした実践の過程は、高齢者を【ありのままを見る】ことにより【高齢者の強みの把握】がなされ、【強みを活かした看護アプローチ】をしながら、【強みを活かしたことでもたらされた効果の評価】が得られるように看護実践をするものだった。そしてこれらの過程には【育んできた看護観】が影響していた。

第4章 考察

看護師が高齢者の強みをとらえる過程には、「ステレオタイプに高齢者をとらえることからの脱却」、「問題と捉えていたところからの読み替え」から成る〈従来のとらえ方からの脱却〉と「ありのままを読み取る」の2パターンあった。前者では、加齢に伴う身体機能の衰えがもたらす高齢者の行動から見る既存のイメージと、看護の中で従来から使われてきた問題解決型思考が影響し、後者は『ほんとに高齢者だからという塊で、個性ってちょっと潰れていっちゃうんですね。』、『在宅ってすごいなと思うことは、家に帰ってきたら元気になっちゃったというのが、結構ありますね。』にみられるような、これまでの経験や既存の知識から培われてきた【育んできた看護観】に影響されるものだった。看護師の見方が高齢者に対する看護を左右させる可能性が前提にあることを認識し、高齢者をありのままに看られるように老年看護観をいかに育てるかが重要になることが示唆されたと見える。

訪問看護実践場面において看護師によって把握された高齢者の強みは、本人の強みである「能力」、「願望」、「個別的特性」と環境面の強みである「家族」、「経済面」であった。高齢者本人の強みで「願望」、「能力」には該当しない気質、性格、価値観を含む「個人的特性」は今後検討を重ねていく必要はあるものの、新しい枠組みでの強みとして現すことに意味があることが示唆された。

〔引用文献〕

- 1) 内閣府：高齢者のための国連原則，共生社会政策 高齢社会対策
<http://www8.cao.go.jp/souki/index.html>
- 2) 広井良典：ケア学 越境するケアへ．第1版，35-36，医学書院，東京(2000)
- 3) 北川公子：系統看護学講座 専門分野Ⅱ 老年看護学．第8版，73，医学書院，東京(2015)
- 4) 鳥田美紀代，正木治恵：看護者がとらえにくいと感じる高齢者の主体性に関する研究，老年看護，11(2)：112-119(2007)
- 5) 奥野茂代，大西和子：老年看護学 概論と看護の実践．第4版，125-149，ヌーヴェルヒロカワ，東京(2012)
- 6) 前掲4)
- 7) 内海香子，麻生佳愛，磯見智恵ほか：訪問看護師が認識する訪問看護を利用する後期高齢糖尿病患者のセルフケア上の問題状況と看護，日本糖尿病教育・看護学会誌，14(1)：30-39(2010)
- 8) 金子史代：看護師が認識する療養している高齢者のセルフケアとセルフケアに関連する要因，日本看護研究学会雑誌，34(1)：181-188(2011)
- 9) 長畑多代，松田千登勢，小野幸子：介護老人保健施設で働く看護師の痴呆症状に対するとらえ方と対応，老年看護，8(1)：39-49(2003)
- 10) 柿川房子：老年看護授業展開—高齢者疑似体験学習に関する検討，三重看護学誌，3(1)：175-182(2000)
- 11) 中島紀恵子：系統看護学講座 老年看護学．第6版，2-3，医学書院，東京(2006)
- 12) 松本啓子，清田玲子，赤木節子ほか：看護職の考える高齢者の自立に関する意識調査，老年看護学，6(1)：107-113(2001)
- 13) 白澤政和：ストレングスモデルのケアマネジメント いかい本人の意欲・能力・抱負を高めていくか．初版，2-7，ミネルヴァ書房，京都(2009)
- 14) 前掲13)
- 15) Charles A. Rapp, Richard j. Goscha/ 田中英樹監訳：The Strengths Model A Recovery-Oriented Approach to Mental Health Services Third Edition/ ストレングス モデルリカバリー志向の精神保健福祉サービス．第3版，45-66，金剛出版，東京(2011/2014)
- 16) 福岡雅津子，畦地博子：摂食障害をもつ人のストレングスを高めるケア，高知女子大学看護学会誌，38(1)：61-67(2012)
- 17) 佐久川政吉，大湾明美，宮城重二：高齢者ケアにおけるストレングスの概念，沖縄県立看護大学紀要，11：65-69(2010)
- 18) 織田良子，大平志津，関君子ほか：周期的化学療法を受けている婦人科がん患者の強み—日常生活への対処をとおして—，第38回日本看護学会成人看護Ⅱ：59-61(2007)
- 19) 和田道代，山中孝子，中岡りかほか：手術を受けた患者の『強み』を生かした看護—自己概念の再構築過程の分析—，第29回日本看護学会成人看護Ⅰ：187-189(1998)
- 20) 北村隆子：対象者が持つ「強み」についての概念分析，人間看護学研究 10:155-159(2012)